月刊
名大文学部
第143号
隔月刊行

人間の本質を追い求めて ── 和歌文学テキストデータ構築
日本文学

意外かもしれないが、和歌文学は日本古典文学のなかで、テキストデータ化が進んでいる分野である。それは、古典和歌が類型の文学であることに起因する。先例や故実を重んじるのが日本文化の特徴であり、和歌も前代の作品の強い影響下で詠まれてきた。よって、前近代の歌人たちは、先行する和歌作品を参照する必要があり、そのような歌書が古くから求められた。

明治時代には歌番号を考案した『国歌大観』（川合松平、1901～03 年）が刊行され、昭和・平成初期には収録歌数を拡充させ、すぐれた本文を提供する『新編国歌大観』（角川書店、1983～92 年）が刊行された。その後、後者の全文検索が可能になると、和歌研究において必携のテキストと化し、いまや『新編国歌大観』のデータベースなしでは、和歌研究は立ちゆかない状況にある。しかし、『新編国歌大観』は出版時と同じ本文を使用し続けており、検索機能も十分とは言えない。それゆえ、次世代の研究を支える革新的な和歌デジタルテキストの登場が待ち望まれている。

そこで今、「和歌文学テキストデータ構築計画」を始動させるべく、準備に励んでいる。数ある文芸のなかでも和歌は、日本の政治、社会、文化と密接な関係を持ち続け、前近代においては権威を有するものであった。例えば中世は、和歌が国家を成り立たせていた時代といっても過言ではない（小川剛生『「和歌所」の鎌倉時代 ― 勅撰集はいかに編纂され、なぜ続いたか』NHK ブックス、2024 年)。よって、本研究は文学研究を超え、各時代の特質の解明のみならず、人文学研究の基本かつ究極の目的である人間の本質を明らかにすることに繋がると信じている。

しかし、このプロジェクトには多くの仲間と時間を必要とする。我が研究室では、まだ見ぬ地を目指して、ともに航海を続けてくれる乗組員（学部生・院生）を募っている。

加藤弓枝　准教授

「和歌文学テキストデータ構築計画」公式サイト（2025 年春に公開予定）

舞踊と政治イデオロギー ── 中国におけるモダンダンスを追って
中国語中国文学

中国語中国文学分野では、中国言語学や古典文学、近現代文学はもちろん、演劇、舞踊など幅広い分野を研究対象として、深く学び、研究することができる。私は中国の舞踊史、特に 20 世紀初期から中国に受容されたモダンダンスの歴史と政治イデオロギーに関する研究を行っている。

最近は、戴愛蓮 (1916-2016。中国国立バレエ団初代団長、中国モダンダンスの先駆者) が 1946 年に、日本敗戦と中国内戦の狭間に重慶、上海で開催した「辺疆音楽舞踊大会」について、考察を行なっている。本公演の実態をより細部まで再現することを目的に、今秋、上海で資料調査を行った。そこで当時の新聞、雑誌を閲覧して関連する記事や文章を探した結果、思いがけない資料を沢山発見できた。まず、同舞踊大会は、これまでの中国近現代舞踊史では殆ど文字で簡単に紹介されるのみであったが、今回自らの力で多くの画像を見つけ、その様子を視覚的に捉えられたことは、研究者の醍醐味の一つだと思う。次に、同舞踊大会は第二次国共内戦前夜という特殊な時期に開かれたため、単に少数民族の舞踊が披露された場に留まらず、政党の思惑、時局を強く反映しており、民族主義、民衆宣伝の役割を果たしたことが裏付けられた。さらに戴愛蓮がのちに国の舞踊事業をリードする人物になり得たのは、この公演がきっかけであったと改めて認識できた。

このように、私にとって、研究のモチベーションは、当時の資料、文献を収集し、舞踊家の自伝や口述と照合し、隠れていた史実に光を当てることで、これまでの舞踊史の定説を覆す発見と思索の一翼を担っていることだと思う。

王瑩　博士後期課程 1 年

今秋の調査で筆者が発見した資料。1940 年代、「新舞踊」を踊る戴愛蓮の姿。『芸文』第 2 巻、第 5 期

研究は自己表現
文化人類学

いつも何かを恐れて生きてきたように思う。

夕暮れ時に一人で歩く通学路が、留守番中の無人のリビングが、ネットで見かける同年代の天才が、怖かった。

そんな私は今、大学で怪談の研究をしている。インターネット上で語られる怪談、ネット怪談の研究である。

中でも私がテーマにしているのは「人怖」と呼ばれる説話群だ。「人間が一番怖い」というキャッチフレーズはご存じの人も多いだろう。オカルトでない、生身の人間が引き起こす恐怖のエピソードだ。

そんなものが研究の対象になるのかという疑問を持つ方もいるだろう。答えは紛れもなくイエスである。文化人類学では人間の文化にまつわるものすべてが研究対象となる。マサイ族もチーズ牛丼もちい○わも、もちろんネット怪談もだ。

ではどのように研究するのか、ご紹介しよう。

「人怖」と呼ばれる話には奇妙な特徴がある。それは「ある個人が別の個人に出会う」話が非常に多いという点だ。いわゆる異常人物遭遇譚であり、事例全体の半分ほどを占めている。

この特徴は「現代における個人主義の表れ」であると解釈できる。現代日本は都市社会であり、都市の中では個人同士の関係性は薄い。道行く人はほぼ見知らぬ他人だ。かつての村社会、住民同士がほとんど知り合いであり共同体としてまとまりのあった村社会とは決定的に異なっている。つまり「ネット怪談には世相が反映されている」のだ。

「研究とは一種の自己表現である」と聞いたことがある。その通りだと思う。研究対象に何を選ぶかは自分の興味関心次第であり、興味関心とは自分の人生の鏡だ。私の場合それは「恐怖」であり「怪談」だった。あなたは？

栗木謙成　学士課程 4 年

長野県木曽郡、王滝村。御嶽山の麓に位置し、山岳信仰やスキー場・オフロードパークなどで知られる。写真は 2024 年 7 月、東研究室での実習のもの。

編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2025 年 1 月 10 日発行